

焼け出された私の幼い頃を振り返り

三田 幸子

私は、大阪で生まれ、六歳の時、空襲に出会いました。

焼い弾の落ちる火の中を、長男一歳、次女二歳、そして私六歳の三人を、母は、おんぶしたり抱いたり、鳥目の私を横に連れながら、ミルクとおしめだけを持って、命からがら、京都に逃げ込んで来ました。

その当時、父は太平洋戦争の兵隊として出ており、家にはいませんでした。

私たち親子は、母を中心にたどりついた修学院の詩仙堂のそばにある、見知らぬお百姓さんの納屋を借りることができました。きっと私たちをかわいそうと思って貸してください。思ったのだと思います。そこで私たちは、むしろを敷いて雨露をしのぐ暮らしを始めたのです。

母は、赤ちゃんに飲ませる乳がなく、お百姓さんから、わずかのお米を譲ってもらい、それを重湯（おもゆ）にして飲ませていました。また、近くの配給所で配られる雑炊やぬか粉、なんば粉やコーリヤンなどを水で練り上げ、団子にして食べたりしました。

そして、納屋の周囲などには、カボチャやさつま芋を植えさせてもらい、それを食べて何とか毎日をしのいでいました。

納屋の夏は、大変暑く、涼を取るのは、近所の川で遊ぶのが関の山で、洗濯も川でしました。夜は、のみや蚊に苦しめられました。また、冬は、ミカン箱などでこしらえられた「こたつやぐら」の中に電球を入れ、ふとんをかぶせて暖を取り、みんなが足を突っ込んで寝ました。

その後、出征していた父が、腰やひざを痛めて陸軍病院に入院し治療を受け、少し調子が回復し、足を引きずりながら私たちの住む納屋に帰って来ました。うれしいことでした

。父は、私たちが焼け出された家を見に行き、その庭にあった防空壕の土を掘り起こし埋めてあった柳こうりを二つ取り出し、その中に詰まっていた着物などを納屋に持ち帰りました。それは着るのではなく、お米や大豆、食器や鍋などと取り替えてもらって暮らししていたのです。

私たちの身の回りで使う物は、手製の物が多く、はし一つにしても、竹を取って来ては、小刀で割ったり削ったりして大事に使いました。履物も、お百姓さんに分けて頂いたわらを編んで草履を作り履いていました。

さて、このように戦争で焼け出された当時の暮らしを思えば今は極楽もいい所です。平和って本当にありがたいと思います。

そして私も、理解のある主人に巡り合い、子供たちも大きくなって、いいお嫁さんも迎え孫までいます。この平和、いつまでも続けたいものです。世界中へも広げましてー。